

今瀬剛一 プロフィール

昭和11年（一九三六） 東京生まれ

昭和19年（一九四四） 父の生地である茨城県東茨城郡小松村

（現在の城里町）に疎開し、以後同地に住む。

茨城県立水戸第一高等学校時代にホトトギスの俳人でもあった音楽教師・瀧豊（俳号：鼓泉子）の指導のもとで俳句の作成を開始する。

昭和36年（一九六一） 「夏草」入会。

昭和46年（一九七一） 「沖」創刊とともに参加し能村登四郎に師事。

昭和61年（一九八六） 「対岸」を創刊・主宰。

平成20年（二〇〇八） 句集『水戸』により第47回俳人協会賞受賞。

現在 俳人協会名誉会員 日本現代詩歌文学館評議委員

日本文藝家協会会員 日本ペンクラブ会員

東京新聞茨城版「ひたち俳壇」の選者

大子町観光大使などを務める。

句集 『対岸』『約束』『週末』『高音』『晴天』『仲間』

『大祖』『新船』『水戸』『地力』『甚六』

俳書 『余情の文学』『季語実作セミナー』『新・選句練習帳』

『芭蕉体験・二冊子をよむ』『芭蕉体験・去来抄を読む』

『能村登四郎ノート』(一)・(二)など。

季感派という立場から

今瀬剛一

一 はじめに

ア 「季語」か「季題」か

「公認された美の題目」を季題、「その美の公認されていない、季節の様々な詞」を季語と言う。（山本健吉）

イ 一般的な「季語」に対する考え方の区分

ア 有季派 ① 無季容認派 ② 無季派

ウ 私の立場は、季感派とでも言いたい。

二 芭蕉の立場

ア 芭蕉の季に対する基本姿勢

…発句も四季のみならず、恋・旅・名所・離別等の句あり
たきもの也。されどいかなる 故ありて、四季のみとは定め
置かれけん、その事を知らざれば暫黙止侍る也。（『去来抄』）
…季節の一ツもさかし出したらんは、後世によき賜也と…
（『去来抄』）

…今日去来きせるの掃除、去來一世之初たる故、きせるの
掃除壬（閏）五月と季を定申候…（支考宛書簡）

イ 芭蕉の無季の作品二句

歩行ならば杖突坂を落馬哉（『笈日記』）
海に降る雨や恋しき浮身宿

三七十年の俳句体験を通して

ア 高等学校校時代の恩師、瀧豊（鼓泉子）先生から学んだこと
初めての作品

原句 くちすすぎ仰ぎて見ればただ青葉
添削句 くちすすぎ仰ぎ眺めむ夏木立

イ 山口青邨先生から

風土・季の重要性・季の中に生きているような先生
みちのくの町はいぶせき氷柱かな 山口青邨
蟋蟀のこの一徹の貌を見よ 山口青邨
笑ふ山から郵便夫来る足音す 今瀬剛一
夕月や破船に沈む時が来し 今瀬剛一

ウ 能村登四郎先生から得たもの

方丈の大庇より春の蝶 高野素十
一月の川一月の谷の中 飯田龍太
火を焚くや枯野の沖を誰か過ぐ 能村登四郎
睦みては拒み忘春の石十五 能村登四郎
新しき蛇草ほどに匂ひけり 今瀬剛一
まつすぐに蒔くこと他考へず 今瀬剛一

四季感派の立場

俳句は、「①今、②ここに、③生きている、④自分の感動を詠む」

ア 季語の本意について

例えば「さくら」

開く書の第一課さくら濃かりけり 能村登四郎

ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな 村上鬼城

夕桜折らむと白きのど見する 横山白虹

もう勤めなくてもいいと桜咲く 今瀬剛一

咲き満ちてなほ咲く桜押し合へる 今瀬剛一

地震にも散らぬ桜でありにけり 今瀬剛一

イ 新しい季語、季語の復活

万緑の中や吾子の齒生え初むる 中村草田男

吹越や見えざる嶺々の鏘然と 加藤楸邨

鞆に腰かけて読む手紙かな 星野立子

地方の言葉を季語として生かす

海へ十里シガ湧き上がり湧き上がり 今瀬剛一

木の根明く木々が背のびを始めけり 三浦香都子

ウ 季重なり句の中の季語

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々 水原秋櫻子(啄木鳥・秋)

くもの糸ひとすぢよぎる百合の前 高野素十(百合・夏)

蝶落ちて大音響の結氷期 富沢赤黄男(結氷・冬)

紫陽花に秋冷いたる信濃かな 杉田久女(秋冷・秋)

エ 忌日俳句

「糸瓜忌」とか「時雨忌」とか忌日に季節感のあるもの

あくびしていでし泪や啄木忌

木下夕爾

あらひたる障子たてかけ一葉忌

久保田万太郎

たましひのたとへば秋のほたるかな

飯田蛇笏

冬の山さよならさよならさやうなら

今瀬剛一

茅花流し瘦身吹かれ逝きしかな

(鈴木豊一さん)

ともに肩組みたる昔桐一葉

(斎藤夏風さん)

五 まとめ

今回、このお話をするために季語を深く考えてみた。

ア 問答に対する芭蕉の判断から見えてくるもの

例一 凧に二日の月のふき散るか

荷兮

凧の地にも落とさぬしぐれ哉

去來

例二 病雁の夜寒に落て旅寝哉

芭蕉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉

芭蕉

芭蕉の論争も、結果的には季語の優劣であった。

イ 季語の「暑い」「寒い」「やや暑い」「やや寒い」

ウ 最近の異常気象

熱中症(暑気、暑気中りでは済まされない)線状降水帯